

授業科目名	しつけ・トレーニング実習Ⅰ	科目コード	2303014		
開講クラス	動物健康管理学科	コース	動物園・水族館・ドッグ インストラクターコース	学 年	1 年
担当教員	下 藺 武 志				
	実務経験教員（ 有 ・ <input type="checkbox"/> ） 実務経験内容				
開講時期	前期・後期・ <input type="checkbox"/> 年・特別講義・その他		授業コマ数	186 時間	
	<input type="checkbox"/> 須 ・ 選 択 ・ 選択必須		単 位 数	5 単位	
使 用 テキスト1	書 名	室内犬の飼い方・しつけ・お手入れのすべて			
	著 者	矢崎潤			
	出版社	ナツメ社			
使 用 テキスト2	書 名				
	著 者				
	出版社				
参考図書					
授業形態	講義 ・ 演習 ・ <input type="checkbox"/> 実習				
<p><授業の目的・目標> 基礎的な犬のしつけやトレーニング方法について学ぶ。また、トレーニング方法や犬の飼育の仕方、飼い主さんに対するアドバイス方法なども学ぶ。</p>					
<p><授業の概要・授業方針> 前期は犬を扱う上で必要となる基礎的な内容を学ぶ。後期はより具体的なトレーニング方法やトレーニングに使用するグッズについても学ぶ。</p>					
<p><成績基準・評価基準> 別紙「しつけ・トレーニング実習Ⅰ評価表」参照</p>					
<p><使用問題集・注意事項></p>					
<p><関連科目他> 動物行動学Ⅰ</p>					

授業科目名		しつけ・トレーニング実習Ⅰ	
6h/回	授 業 内 容		備 考
1	科目についての説明。		
2	犬の観察の		
3	トレーニング前の準備について・片づけ方について		
4	トレーニング前の準備について・片づけ方について		
5	首輪の着脱・リードの持ち方		
6	誘導・ごほうびの与え方・ほめ方		
7	誘導・ごほうびの与え方・ほめ方		
8	抱っこの仕方		
9	行動を教える手順		
10	レベルアップの手順		
11	アイコンタクト		
12	オビディエンストレーニング（基礎）		
13	オビディエンストレーニング（基礎）		
14	オビディエンストレーニング（基礎）		
15	オビディエンストレーニング（基礎）		
16	前期内容の復習		
17	トレーニンググッズの紹介・使用		
18	トレーニンググッズの紹介・使用		
19	オビディエンストレーニング（応用）		
20	オビディエンストレーニング（応用）		
21	オビディエンストレーニング（応用）		
22	オビディエンストレーニング（応用）		
23	オビディエンストレーニング（応用）		
24	オビディエンストレーニング（応用）		
25	動物病院等の施設を好きにするために		
26	動物病院等の施設を好きにするために		
27	問題と言われる行動の対処法		
28	問題と言われる行動の対処法		
29	これまでの復習		
30	これまでの復習		
31	これまでの復習		

【しつけ・トレーニング実習Ⅰ 学修成果指標・教科担当者評価表】

評価要素項目		実習目標	学修成果評価基準				
			4	3	2	1	
知識と理解	実習に必要とされる科目や学科に対してかなりの知識を有している。	「動物行動学」で学んだ内容をトレーニングに反映させることができる。	動物の行動の意味やボディランゲージ、学習理論など、「動物行動学」で学んだ内容とトレーニングとの関連性を積極的に見出すことができる。	「動物行動学」で学んだ内容とトレーニングとの関連性を見出すことができる。	「動物行動学」で学んだ内容とトレーニングとの関連性のある程度見出すことができる。	「動物行動学」で学んだ内容とトレーニングとの関連性を見出すことができない。	
汎用的な技能	与えられた実習内容に対してスキルを活用しながら対応できる。	実習を振り返り、身だしなみ、実習目標の達成、実習内容の理解、積極的な取り組みなどについて、客観的な自己評価を行っている。	自己評価が客観的で正しく行われており、担当教員による評価と相違ない。	自己評価は正しく行われているが、担当教員による評価とやや相違がある。	自己評価がやや主観的である。	実習後の自己評価はいつも同じで、担当教員による評価と大きく離れている。	
職務上の技能	専門実践技能	実習指導者監督のもとで、課題への取組を解決するための適切な手法やツールを利用する事ができる。	対象動物にトレーニングをするための、基本的な技術を身に付けている。	犬の扱いやトレーニングの技術が非常に優秀である。	犬の扱いやトレーニングの技術が優秀である。	犬の扱いやトレーニングの技術がやや劣る。	犬の扱いやトレーニングの技術が著しく劣る。
	対人技能	職員、飼い主に対して口頭或いは文書で情報、問題解決策を効果的かつ明確に伝える事ができる。	他者とのコミュニケーションを図りながら、トレーニングを円滑に進めることができる。また、分からないことがあればクラスメイトや担当の教員に、積極的に質問することができる。	他者とのコミュニケーションがしっかりとれ、分からないことがあれば積極的に質問することができる。	他者とのコミュニケーションは取れているが、積極的な質問は見られない。	自分からコミュニケーションをとることをしない。	他者とのコミュニケーションが見られない。
	分析技能	仕事や学習に関するデータを解析し活用する能力を有している。	実施したトレーニングの内容を記録し、振り返ることができる。また、その内容を次のトレーニングに活かすことができる。	自己評価シートをしっかりと書き、提出している。	自己評価シートの内容が十分とは言えないが、しっかりと提出している。	自己評価シートの内容が十分とは言えず、提出も毎回ではない。	自己評価シートの内容が不十分で提出されないことも多い。
	管理・指導技能	様々な状況の基で行われる業務執行・学習活動の中で、助言や指導を受けながら、自主性を持って行動できる。	トレーニングをするための準備やその片付けをしっかりとすることができる。	トレーニングをするための準備やその片付けを、自ら進んでしっかりとすることができる。	トレーニングをするための準備やその片付けを、概ねしっかりとすることができるが、積極的に動けないことがある。	何をすれば良いかあまり分かってはいないが、指示を受けて準備や片付けを行うことができる。	準備や片付けをしない。
自律性と責任感	自己研鑽やトレーニングを積むことや、自己の成長を意識しながら、責任感を持って行動できる。	技術を身につけるために、授業に真面目に取り組むことができる。	言われたことは最後まで責任を持ってやり遂げ、自己の成長を意識しながら、自分で考え行動できている。	自分で考えて行動しようとする姿勢は見られる。	自分の考えで行動できないことがある。	責任感や自律性に欠けた行動が頻繁にみられる。	
倫理観とプロ意識	組織の倫理や職業倫理を理解し、行動ができる。	人道的な内容でトレーニングを行うことができる。また、対象動物の安全性を考えトレーニングを行うことができる。	対象動物に危険が及ばないよう配慮しながらトレーニングを行うことができる。	対象動物に危険が及ばないよう配慮しながらトレーニングを行おうとする姿勢は見られるが、甘い部分がある。	そのままでは対象動物に危険が及ぶことが考えられるが、改善しようとする意思は見られる。	そのままでは対象動物に危険が及ぶことが考えられ、改善する意思も見られない。	

※評価方法

上記8項目の基準の合計点数により、以下のように評価する。

合計32点満点中、25～32点が優、22～24点が良、19～21点が可、18点以下が不可

不可の場合は、著しく評価が低い項目に合わせた課題を与え、提出されたその内容が適切な場合は可の評価を与える。